

平成 27 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

【学校像】

「高い志」を持ち、「真のリーダーシップ」を発揮しながら世界で活躍する人材を輩出する学校。

【生徒に育みたい力】

- 基礎・基本の充実と深い学びを通じて未来を拓く力を養い、「高い志」を持って世界に貢献できる有為な人材を育成する。
- ハイレベルな授業を通じて進路実現を可能にする高い学力を養成すると同時に、学校行事や部活動への積極的な参加を奨励し、たくましい人間力を育成する。
- 知的探究心をもって自主的に学習する力を養成すると同時に、互いに協力しつつ切磋琢磨することを通じて、優れたチームワーク意識と高い自治能力を育成する。

2 中期的目標

- グローバルリーダーズハイスクールとしての特色づくりのため、3つの教育目標を深化させる取組とともに教員の授業力向上のための取組を実践する。

1 「高い志の実現」を図る教育システムの再構築

- (1) グローバルに視点を置いた取組を継続発展させる。
 - ア 海外宿泊野外行事及びその事前学習、事後学習を通して多様性受容力を鍛え、コミュニケーション能力を高める。
 - イ 英語教育の内容をより一層充実させる。
 - (2) 「高い志の実現」を可能にする取組を継続発展させる。
 - ア 卒業生人材ネットワークを拡大し、卒業生による支援体制を強化する。
 - ① 大学教授、企業等で活躍する卒業生等による「卒業生講座」。
 - ② 京都大学を中心とした「卒業生の研究室訪問」。
 - ③ 関東方面への大学見学会「東京スタディツアー」。
 - ④ 第1学年対象の「スプリングセミナー」。
 - ⑤ 第2学年対象の「オータムセミナー」。
 - イ 課題研究を通して主体的に学ぶ姿勢を身に付けさせ、大学での学びにつなげる。
- ※東京大学、京都大学、大阪大学、神戸大学の合格者数合計（平成26年度153名）を維持する。
※高等学校卒業時の進路選択について納得している生徒の割合を80%以上にする。

2 「二兎を追うたくましさ」を育成するための教育システムの再構築

- (1) 授業重視と自学自習の意識を高める。
 - (2) 3年間を通した育成計画「北辰プロジェクト」を充実させるとともに、それに基づいて生徒にめあてを提示する。
 - (3) 学習と部活動・学校行事の両立への意識を高める。
 - ア リーダー育成研修を継続させる。
 - イ スクールトレーナー事業を継続発展させる。
- ※1、2年生の一日当たり平均自学自習時間（平成26年度84分）を平成27年度120分にし、以降それを維持する。

3 「自主自律の精神」を深化させるための教育システムの再構築

- (1) 学校行事を中心に「自主自律の精神」を育成するシステムを充実させる。（違いを認め共に生きる力、協調性、豊かな感性）
 - (2) 部活動・同好会活動を中心に「自主自律の精神」を育成するシステムを充実させる。（健康・体力の向上）
 - (3) 生徒会活動を中心に、生徒自らが規範意識やモラルを高めることができる取組を実施する。
- ※遅刻件数（平成26年度生徒一人当たり平均年間3.6回）を平成28年度には生徒一人当たり平均年間3.0回にする。

4 教員の授業力向上のためのシステムの構築

- (1) 教科会議の充実（教科の目標設定と総括、研究授業）・相互授業見学の充実・大学等との連携の深化
- ※授業観察の際の生徒アンケートにおける授業信頼度平均88%以上を維持する。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成28年1月実施分]	学校協議会からの意見
<p>【生徒版】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「将来の進路や生き方について考える機会がある」という問いに対する肯定的な回答が93%と高い数値を示している。これは、日々の教職員による様々な取組に加え、卒業生講座や各セミナーをはじめとする卒業生の支援体制の充実の結果と考えることができる。今後も生徒が「高い志」を持ちそれを持続させることを可能にするための取組を継続発展させていくことが必要である。 ・「担任の先生以外にも、気軽に相談できる先生がいる」という問いに対する肯定的な回答が52%とやや低い数値となっている。教育相談体制の充実も含め、生徒指導をより充実させていくことが必要である。 <p>【保護者版】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校独自の事業に対して支持する回答は、いずれも97%を超える非常に高い割合を示している。一方で、事業の認知度は、昨年度から増加しているものの、非常に高いとは言えないものもある。今後もそれぞれの事業の内容を深めていくとともに、周知に努めていく必要がある。 ・「生徒は、授業がためになると言っている」という問いに対する肯定的な回答が86%と、昨年度の数値87%とほぼ同じである。生徒、保護者の授業への信頼度を維持しさらに高めるため、教員の授業力向上のための取組の内容をより深めていくことが必要である。 	<p>第1回（5/16）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○TOEFL iBT 英語教育について ・茨高が英語のカリキュラムを設定してSETを迎えるというのはよいことである。この1年間しっかりと取り組んで検証してもらいたい。 ○数値目標について ・数字が独り歩きするとよくない。引き続き中身にもこだわってもらいたい。学校文化の継承を意識的に行い、教育内容を校外へ発信してもらいたい。 <p>第2回（9/26）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○リーダー育成プログラムについて ・教職員が異動で入れ替わっても、何のためにこの取組をしているのか理解してもらうことが大切である。また、外部講師へのフィードバックもしてもらいたい。 ○自習室の活用について ・生徒が皆で学ぶところに自習室の意義がある。チームを組んで協力して問題解決する力を付けることにつながる。 <p>第3回（2/20）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○リーダー育成プログラムⅡについて ・新入生オリエンテーションに向けた取組であるハートアクティビティプログラムで生徒は成長し、それが茨高生のアイデンティティとなる。 ○進路選択について ・生徒が高い意識で納得できるようにしてもらいたい。 ○全般について ・卒業生を活用する仕組みを意識して活かすようにしてもらいたい。 ・茨高文化をしっかりと育てていってもらいたい。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 「高い志の実現」を図る教育システムの再構築	<p>(1) 「グローバル」に視点を置いた取組</p> <p>ア Brothers & Sisters プログラム及び事前学習の充実、海外宿泊野外行事及び事後学習の充実</p> <p>イ 英語教育の内容のさらなる充実</p> <p>(2) 「高い志の実現」を可能にする取組</p> <p>ア 卒業生との連携の強化による取組の充実</p> <p>イ 創立 120 周年を記念した取組の実施</p>	<p>(1) ア 長期留学生の受入れ、海外からの研修旅行生との交流、第 1 学年全員を対象とした大阪大学留学生との交流により、アジアを中心とした異文化理解や他国理解を深める。また、生徒の企画運営による事前学習を重ねて、宿泊野外行事へとつなげる。 第 2 学年の宿泊野外行事においては、学校交流とともに JICA や現地日本企業の協力による取組を重視する。また、事前学習や現地で学んだ内容を課題研究につなげる。 イ TOEFL iBT 英語教育の充実に向け、再構築した英語の授業内容を実施・検証するとともに、英語イマージョンプログラムを継続発展させる。</p> <p>(2) ア 本校卒業生の人材ネットワークを広げ、学問及び社会に対する興味・関心を高める取組を充実させる。 ・卒業生講座を継続発展させる。また、「スプリングセミナー」等も含めて、卒業生によるキャリア教育に資する講演会や講座を実施する。 ・京都大学を中心に卒業生の研究室訪問を継続する。 ・関東方面への大学見学会を継続する。その際の卒業生との連携を強化し、より広い視野で進路を考える場とする。 イ 卒業生等の協力も得ながら、創立 120 周年を記念した取組を実施する。 ・「茨高教育シンポジウム」 ・展示「茨木高校の 120 年をたどる記念展示」 ・生徒による 120 周年記念音楽会 等</p>	<p>(1) ア・交流する大阪大学留学生数 50 名以上 ・宿泊野外行事終了後の生徒アンケートにおける満足度 90%以上 イ・イマージョンプログラムへの参加者 80 名以上 ・イマージョンプログラム参加生徒のアンケートにおける満足度 90%以上</p> <p>(2) ア・キャリア教育に資する卒業生の講演会や講座の数 4 以上 ・卒業生の研究室訪問 3 か所以上 ・関東方面の大学見学会への参加生徒 20 名程度、支援する卒業生 20 名以上 ・各取組に対する生徒の満足度 80%以上 イ・各取組に対する生徒の満足度 80%以上</p>	<p>(1) ア・ドイツからの長期留学生 1 名を受け入れており、留学生が年末に全校集会で発表を行った。また、4 月には台湾の高校からの研修旅行生 25 名を第 2 学年全体で受け入れた。Brothers&Sisters プログラムにおいては、第 1 学年の生徒が小グループに分かれてアジアからの大阪大学留学生 58 名と交流した。(○) ・宿泊野外行事終了後の生徒アンケートにおける満足度は 99%であった。(◎) イ・英語の授業内容を検証し、次年度の授業内容を作成している。英語イマージョンプログラムへの参加者は 101 名 (I 70 名、II 31 名) である。満足度は I II ともに 100%であり、極めて充実した取組となった。(◎)</p> <p>(2) ア・14 名の卒業生を招いて卒業生講座を実施し、そのうちキャリア教育に資する講座を 2 講座設けた。また、卒業生講座以外に社会で活躍する卒業生の講演会を 2 回実施した。(○) ・卒業生の研究室訪問を 5 か所実施し、50 名の生徒が参加した。(◎) ・関東方面の大学見学会に 14 名の生徒が参加した。またその際、東京在住の卒業生 31 名との交流の機会も設けた。(○) イ・シンポジウムは全校生徒参加で行い、各界で活躍する卒業生に生徒代表も交えてパネルディスカッションを行った。生徒の満足度は 93%であった。展示は生徒全員が見る機会を設け、卒業生、一般の方々も含めて約 1400 名が来場した。記念音楽会は生徒 270 名が舞台上に立ってプロのオーケストラとの協演を行い、来場者から数々の賛辞をいただいた。(◎)</p>
2 3 「二兎を追うたくましさ」を育成するための教育システムの再構築	<p>(1) 「二兎を追うたくましさ」の育成とリーダーの育成</p> <p>ア リーダー育成プログラムⅠの充実</p> <p>イ リーダー育成プログラムⅡの充実</p> <p>ウ リーダー育成プログラムⅢの充実</p> <p>(2) 「二兎を追うたくましさ」の育成と「自主自律の精神」の育成</p> <p>ア 生活規律を高める精神の育成</p> <p>イ 自学自習の精神の育成</p>	<p>(1) ア 各部・同好会の部長等 (40 人程度) に対して、リーダー性を発揮できるように育成していくプログラムを充実させる。 リーダー論やコーチングの手法、人間関係トレーニング等を実施する。 イ 各クラス HR 委員 (50 人程度) に対して、HR 行事・学年行事・学校行事等の企画力を育成するプログラムを充実させる。 紛争解決能力やリーダー性を高める内容を重視する。 ウ 部活動に参加する部員を対象に、スクールトレーナー (理学療法士) による指導・支援を定期的に行い、健康を自己管理する能力を高めるとともに、高い志を持ち、諸活動において良い結果を出せるよう取り組む。</p> <p>(2) ア 遅刻に対する指導を強化し、生徒が自らを律する力を高めることができるよう取り組む。 イ 自学自習の精神の育成のため、担任、教科担当者、部顧問からの指導を徹底する。また、そのための支援として年間を通じて自習室を開設する。</p>	<p>(1) ア・リーダー育成プログラムⅠの実施回数 12 回以上 ・参加生徒のアンケートにおける満足度 80%以上 イ・リーダー育成プログラムⅡの実施回数 8 回以上 ・参加生徒のアンケートにおける満足度 80%以上 ウ・リーダー育成プログラムⅢの実施回数 12 回以上 ・参加生徒数のべ 900 名以上 ・支援する理学療法士のべ 120 名以上 ・スポーツ振興センター手続き件数 160 件以下</p> <p>(2) ア・遅刻数一人当たり平均年間 3.3 回以下 イ・自習室利用生徒数一日平均 35 名以上 ・一日当たりの平均自学自習時間 120 分以上</p>	<p>(1) ア・年間 13 回実施し、のべ 899 名の生徒が参加した。そのうち 3 回行った外部講師による講演の満足度は、97%であった。(◎) イ・年間 13 回実施し、のべ 515 名の生徒が参加した。そのうち 1 回行った外部講師によるハートプログラムの満足度は 75%であった。(○) ウ・年間 12 回実施し、のべ 980 名の生徒が参加した。また、のべ 198 名の理学療法士に指導していただいた。なお、年間のスポーツ振興センターの手続き件数は 143 件である。(昨年度同期間の手続き件数は 119 件。)(◎)</p> <p>(2) ア・年間の遅刻数は、のべ 1927 件であり、昨年度と比較して 1641 件減少した。生徒の自覚を高める取組を継続して実施したい。(◎) イ・年間の自習室利用生徒数は一日平均 17 名である。生徒の学習スタイルを把握するとともに、自習室開室の経緯を生徒に理解させていきたい。(△) ・平日の一人あたりの自学自習時間平均は、2 年生 93 分、1 年生 104 分 (9 月調査) といずれの学年も前年度に比べて増えている。自習室の開室や定期考査前の卒業生による学習支援と併せて、自学自習の意識を高めるよう、引き続き指導していきたい。(○)</p>
4 教員の授業力向上のためのシステムの構築	<p>(1) 授業力向上のためのシステムの充実</p> <p>ア 教科会議の充実及び研究授業の実施</p> <p>イ 教員相互の授業評価の充実</p> <p>ウ 管理職による授業評価の充実</p>	<p>(1) ア 教科会議を授業力向上のための研修の場として位置付けるとともに、研究授業を行うことにより、教科としての授業力向上をはかる。 イ バディシステムを定着させ、互見授業により教員の授業力を向上させる。 ウ 全教員の授業観察の際に、管理職によるアンケートを生徒に実施・分析し、授業アンケートとともに授業力を把握する材料とする。</p>	<p>(1) ア・全教科で研究授業年 1 回以上実施 イ・互見授業教員一人当たり平均年 2 回以上 ウ・生徒からの授業信頼度 88%以上</p>	<p>(1) ア・全教科で年 1 回以上研究授業を実施した。また、各教科で今年度の教科指導についての総括を行った。教科会議においては教科指導の内容についての意見交換、授業アンケートの結果の分析等、授業力向上のための議論ができていく。(○) イ・年間の互見授業は、教員一人当たり平均 2.7 回である。教員の授業力のさらなる向上のため、引き続き実施したい。(○) ウ・全教員の授業を観察し、各授業終了時に生徒へのアンケートを実施した。結果の一部を教員に返し、年 2 回実施している授業アンケートとともに教員が生徒の状況を把握し、授業改善策を考える材料とした。生徒からの授業信頼度は 89%であった。(○)</p>